3・11 あのとき私は ⑩

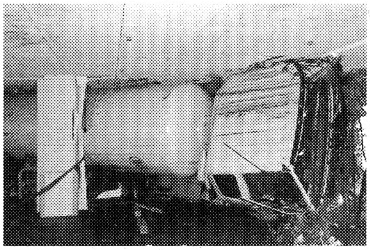
後藤博さん（石油ガス工事）

ローリー車

地下駐車場に横倒し

残液量不明 燃焼させ霜の位置で確認

翌早朝、多賀城市に入った。津波の被災地を見るのはこのときが初めてだった。その想像を超える惨状に、あ然とした。



ヤマダ電機駐車場に流れ込んだローリーは柱に引っかかって止まっていた

ヤマダ電機はイオンやコジマ電器、ユニクロなど郊外型大型店舗の集まる一画にあった。建物の１階が開放型の駐車場になっていた。ローリーはその駐車場の中にはまり込み、横倒しになって柱にぶつかって止まっていた。後藤さんたちは周囲を検知器で点検した。ガスは漏れていなかった。

タンク内のガスを処理するには残液量を確認しなければならない。しかし、横倒しになっておりノズルが水平になっているため残液量が半分以上か以下かしか分からない状態だった。ローリー会社に聞こうとしても、そこも津波の被害を受けているため無理だった。燃焼器につないで燃焼させ、タンクに付く霜の位置で残液量を確認する手段を後藤さんは警察や消防に提案した。すると、市役所の緊急対策本部で説明することを求められた。

市役所に行って、警察、消防、国交省職員、市の幹部など30人の前で説明した。液が出てきても安全なように一度５００キロ容器に移し、そこから燃焼器につないで燃やす。その図を黒板に描いて説明した。消防本部職員から「もし爆発したら、どれくらいの地域が危険になるのか」と質問された。後藤さんは「爆発するようなことはない」と答えた。

現場に戻った。白石工場からは見当を付け、５００キロ容器５本、燃焼器、ブロアー、発電機などを持ってきていた。ローリーの液ラインに15メートルのホースをつなぎ、気液分離するためクッションタンク代用品としての５００キロ容器を介してそこからさらに13メートルのホースで燃焼器につないだ。夕方になっていた。

燃焼器に火を着けた。燃焼器は１時間に２００キログラム消費する。着火して１時間。霜が着いたのはローリーのタンク下部10センチメートルのところだった。積み込み前のローリーだったのだ。中のガスを燃焼させる方法で処理することが決まった。

3月20日、後藤さんは大船渡にいた。被災した充填所を見て回っていると、盛川にかかる佐野橋の近くで路上に15トンタンクが横たわっているのを見つけた。

（続く）